

Economic Monitor

2011年4～6月期の貿易動向分析：大震災が大きく影響

大震災に伴うサプライチェーン途絶により急減した輸出は4月をボトムに回復しつつあり、7～9月期にはV字回復へ。自動車のみならず、電機の輸出も回復へ転じたことは明るい動き。貿易収支は夏場に収支均衡、10～12月期には黒字を回復する見込み。しかし、大震災とその後の政治混乱を経て、エネルギー輸入構造の変化と企業の海外シフト加速など不可逆的な変化が生じている可能性が高く、日本の貿易構造が震災前に復帰することは困難に。

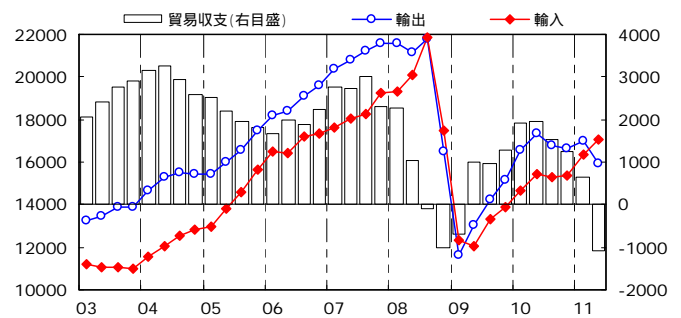
大震災を受けて輸出急減

2011年4～6月期の貿易動向を振り返る。4～6月期の貿易動向は、3月11日に発生した東日本大震災を抜きに語ることは出来ない。大震災による工場被災やサプライチェーン途絶、原子力発電所の停止は輸出と輸入の両面において甚大な影響を及ぼした。自動車セクターを中心に生産が滞り、供給制約が生じたために輸出が急減する一方、工場被災を補うための代替輸入が増加したことから生産や輸出との対比において輸入は堅調に推移した。その結果、4～6月期の貿易収支は原系列で1.25兆円、季節調整済系列では1.07兆円の赤字に転落した。四半期ベースでの赤字転落は金融危機に伴う2008年7～9月期から2009年1～3月期にかけての3四半期連続以来である。貿易収支は6月に原系列ベースで若干の黒字を回復したが、季節調整済系列では未だ赤字に留まる。輸出持ち直しが浸透し、収支が安定的に均衡するのは7～8月、黒字を回復するのは10～12月期となる見込みである。

日本の貿易構造に不可逆的变化も

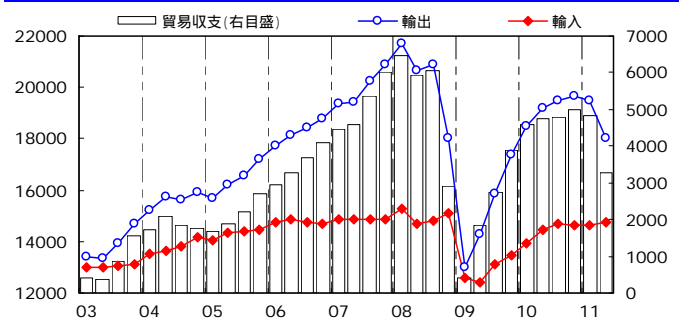
収支が黒字を回復したからと言って、日本の貿易構造が大震災前を回復することは二つの観点から考えにくい。第一は輸入側の要因である。大震災を契機として原子力発電への依存度を低下させようとする動きは不可逆となっており、再生可能エネルギーによる発電が一朝一夕に拡大しない下では、火力発電のシェアが高まらざるを得ない。そのため発電のための石炭や原油、LNGなどの輸入拡大が不可避である。第二は輸出側の要因である。今回の大震災を踏まえて、企業は日本立地集中リスクを回避すべく、国内から海外への生産シフトを一層強化すると考えられる。加えて、現政権の混乱や無策による電力供給及びコスト増加に対する懸念が、海外シフトを加速させる可能性も高い。2007年に10兆円を上回っていた貿易収支（貿易統計ベース）は、金融危機を受けて2008年に2兆円まで急減した後、世界経済の高成長による輸出増加が寄与し2010年には6.6兆円まで回復した。大震災無かりせば2011

名目輸出入の推移(10億円、季調値)



(出所)財務省、日本銀行

実質輸出入の推移(10億円、季調値、2005年基準)



(出所)財務省、日本銀行

年には更なる増加が期待されていたところである。しかし、今後の貿易収支は、2011年は言うまでもなく2012年も、2007年の10兆円はどこか2010年の6.6兆円にも届かない水準に留まると考えられる。大震災とその後の政治混乱による人的災害を受けて、日本の貿易構造には修復しようがない断層が生じつつあるのではないだろうか。

以下では、主として当社試算の実質輸出入に基づき、輸出について仕向け地別及び品目別の動向を、輸入については品目別動向を見ていく。

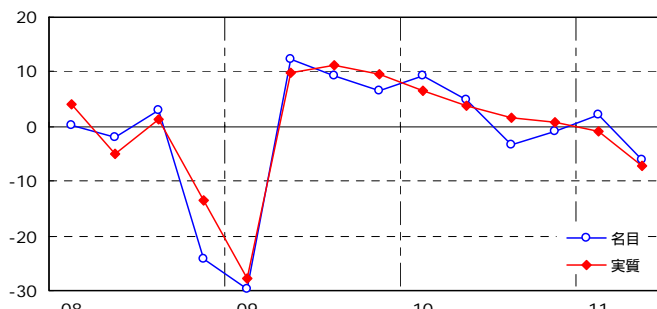
1. 輸出動向

4～6月期の名目輸出総額（対世界輸出）は前期比6.1%（1～3月期2.2%）と大幅に減少した。但し、月次で見ると、3月前月比8.2% 4月5.4%と2ヶ月連続で急減した後、5月2.2% 6月5.4%と回復している。当社試算の実質ベースでも3月10.5% 4月7.7% 5月5.4% 6月8.0%であり、やはり5月を転換点として回復へ転じているが、4月までの落ち込みが響き4～6月期は前期比7.3%（1～3月期0.9%）の大幅な落ち込みを記録した。

実質ベースで品目別動向を見ると、4～6月期に輸出全体を大きく押し下げたのは、サプライチェーン途絶による生産停止を余儀なくされた自動車を含む輸送用機器である。前期比16.4%と急減し、輸出全体に対し3.4%Ptもの下押し寄与となった。但し3月前月比19.8% 4月27.1%と落ち込んだ後、サプライチェーン復旧を受けて5月31.3% 6月24.8%と急回復へ転じている。なお、最大の減少率は食料品の前期比20.0%であり、放射能汚染に伴う海外の輸出停止が響いた。但し、食料品輸出のシェアは0.6%（2010年）しかないため、輸出全体に対する影響は極々軽微である。

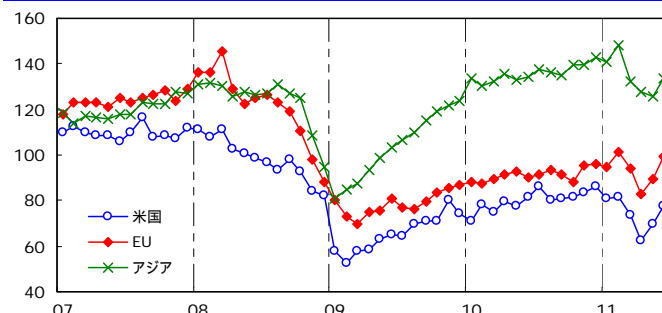
輸送用機器に次いで押し下げが厳しいのは電気機器であり、前期比9.4%と二桁近い減少、輸出全体を2.4%Pt押し下げた。他に化学製品（8.0%）や金属及び同製品（4.9%）なども大幅な減少を記録している。こうした減少には、多かれ少なかれ大震災が影響した。しかし、電気機器については世界的なIT・デジタル分野の生産調整が、金属についてはアジア地域での需要鈍化の動きが、大震災以上のイ

名目輸出と実質輸出の比較（前期比、%）



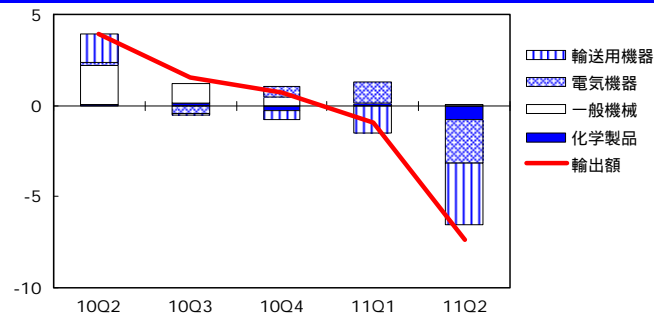
(出所) 財務省、日本銀行

地域別実質輸出の推移（2005年=100）



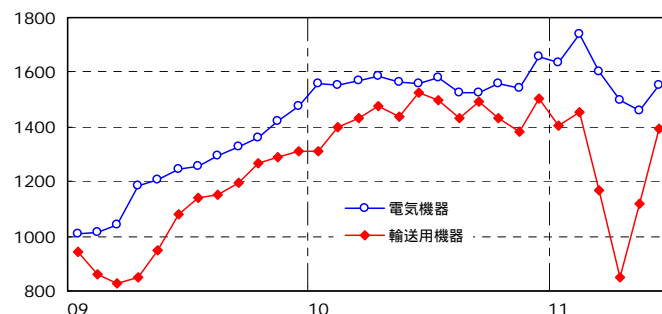
(出所) 財務省、日本銀行

対世界（実質、前期比、%）



(出所) 財務省、日本銀行

実質輸出の品目推移（10億円、季調値）



(出所) 内閣府

ンパクトを及ぼしたと考えられ、全てを大震災に帰するのは適切ではない。それは、電気機器輸出の回復が輸送用機器よりも遅い6月にズレ込んだこと(3月前月比 7.8% 4月 6.8% 5月 2.4% 6月6.4%)、金属及び同製品は5月以降の落ち込みが厳しいこと(3月 3.0% 4月0.8% 5月 4.5% 6月 4.3%)から確認できる。一方、一般機械(1~3月期0.1% 4~6月期0.3%)や科学光学機器(3.3% 2.3%)は被災工場が少ないこともあり、大震災の影響は軽微に留まり、増勢を維持した。

6月の実質輸出総額は4~6月期を7%も上回っており、7~9月期は少なくとも前期比7%超の大幅拡大になる見込みである。

対アジア(1~3月期前期比 1.6% 4~6月期 9.2%)

アジア向け輸出は前期比 8.1%と、輸出総額の 7.3%を上回る予想外に大幅な落ち込みを記録した。アジア向けは自動車関連輸出の比率が7.5%と、米国33.3%やEU18.7%に比べて低いため、大震災の影響も軽微と当社では考えていた。しかし、実際には世界的なIT・デジタル分野の調整が響き電気機器輸出が6.0%と大きく落ち込み、アジア向け輸出全体を1.7%Ptも押し下げた。なお、輸送用機器輸出は16.2%で、1.3%Ptの寄与である。他では化学製品の落ち込みが9.5%(寄与度1.2%Pt)と大きい。

アジア向けの内訳では、中国向けの落ち込みが前期比16.5%に達し、NIEs 4.4%やASEAN 2.6%を大きく上回った。NIEsやASEAN向けでは増勢を維持した金属製品や一般機械も中国向けは二桁減を余儀なくされている。中国向けについては、日本側の供給制約要因以上に、中国国内での在庫調整の動きが影響した可能性が高い。

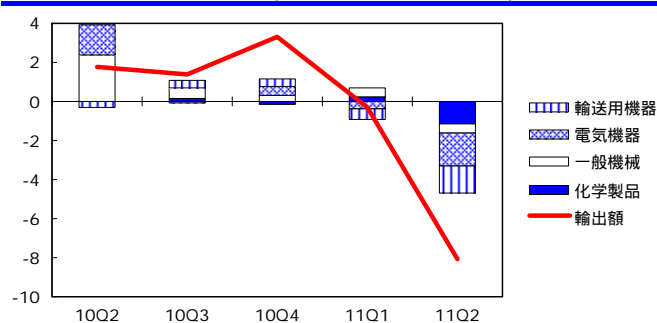
4~6月期のアジア向け輸出を大きく押し下げた電気機器輸出も6月には前月比6.4%と明確に持ち直し、生産調整が漸く終了したと考えられる。詳細は日本の生産統計などで確認する必要があるが、明るい動きの一つと言えるだろう。6月のアジア向け輸出は4~6月期平均を3%上回るに留まり、ゲタは小さいが電気機器輸出の回復が順調に進めば、7~9月期に高い伸びを記録する可能性もある。

対米国

(1~3月期前期比 5.9% 4~6月期 11.4%)

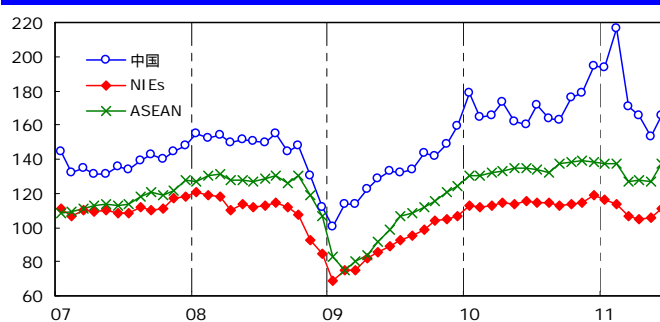
米国向けは4~6月期の減少の、実に7割超が輸送用機器によるものである。輸送用機器の輸出は4~6月期に前期比24.9%と急減し、全体を8.3%Ptも押し下げた。1~3月期に米国の新車販売が好調だったにも関わらず、日本からの輸送用機器の輸出は1

対アジア(実質、前期比、%)



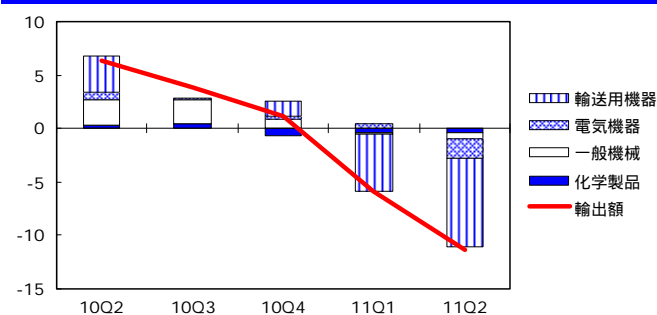
(出所)財務省、日本銀行

対アジア実質輸出の推移(2005年=100)



(出所)財務省、日本銀行

対米国(実質、前期比、%)



(出所)財務省、日本銀行

~3月期に14.6%と大幅に減少し、在庫圧縮が進んだ。そうした低い在庫水準の下でのサプライチェーン途絶による供給制約の発生が、日本メーカーの4~6月期にとって大きな障害になったと推測される。

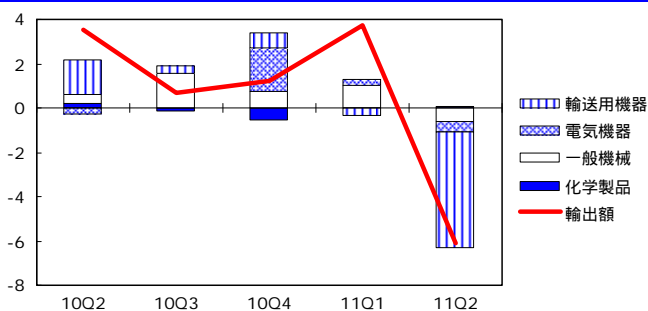
なお、輸送用機器輸出は3月前月比24.9%、4月40.8%と落ち込んだ後、5月53.0%、6月26.0%と急回復している。それに伴い6月の米国向け輸出全体は4~6月期平均を10.9%も上回り、7~9月期は既に大幅なプラスのゲタを履いている。7~9月期の米国向け輸出は二桁増加が期待される。

対EU(1~3月期前期比3.7% 4~6月期6.1%)

EU向けも米国向けと同じく、4~6月期の落ち込みは、そのほとんどが輸送用機器輸出によるものである。輸送用機器輸出は前期比24.5%と急減し、全体を5.2%Ptも押し下げた。やはり、5月以降の輸送用機器輸出の急回復により、EU向け輸出全体は6月水準が4~6月期平均を9.7%上回っており、7~9月期は大幅な増加が確実である。

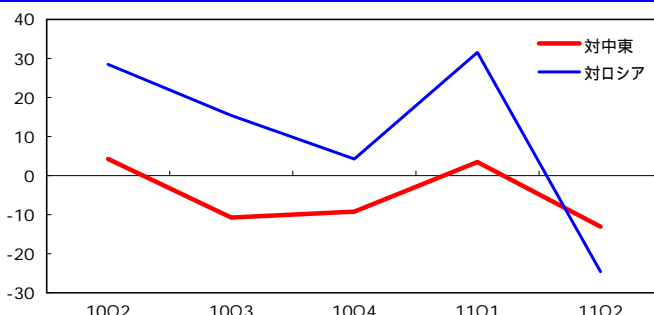
対中東(1~3月期前期比3.5% 4~6月期13.1%)、対ロシア(1~3月期31.7% 4~6月期24.5%)いずれも輸送用機器輸出のウェイトが高い。中東向けは輸送用機器輸出が前期比30.8%も落ち込み、全体を16.4%Pt押し下げた。輸送用機器輸出以外は4~6月期に寧ろ増加している。また、ロシア向けも輸送用機器輸出が26.3%と落ち込み、全体を17.0%Ptも下押ししている。

対EU(実質、前期比、%)



(出所)財務省、日本銀行

対中東、対ロシア(実質、前期比、%)



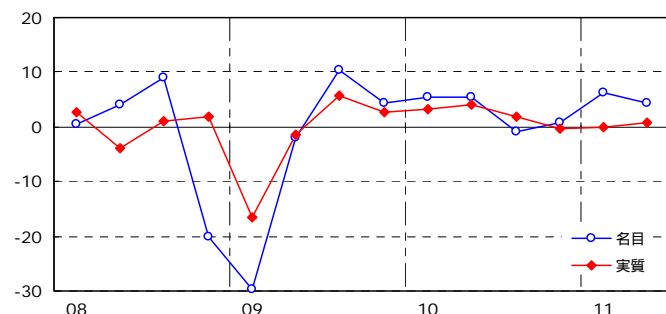
(出所)財務省、日本銀行

2.輸入動向

4~6月期の名目輸入総額は前期比4.2%と、1~3月期6.2%に続き、2四半期連続で高い伸びを示した。但し、輸入物価指数の7.3%上昇(1~3月期7.3%)が示すように、原油等の価格上昇による部分が多い。実質ベースでは0.7%(1~3月期0.0%)と低い伸びに留まる。月次で見ると3月こそ前月比2.3%と減少したものの、4月1.6%、5月2.8%と代替輸入の増加により輸出に先駆けて逸早く持ち直した。但し、国内生産回復に伴う代替輸入の縮小により、6月は0.6%へ減速している。

実質ベースで品目別動向を見ると、まず代替輸入の影響が見て取れるのが繊維製品(4~6月期前期比10.3%)と化学製品(7.9%)、食料品(5.9%)の大幅増加である。コンビナート被災などに伴う生産停滞を輸入で補った。但し、化学製品(4月前月比14.7%、5月5.5%、6月0.7%)など、多くの品目が5月以

名目輸入と実質輸入の比較(前期比、%)

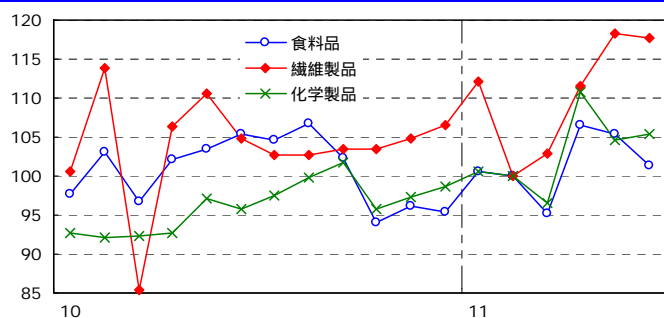


(出所)財務省、日本銀行

降は増勢がピークアウトしている¹。逆に尻上がりに増加基調を強めているのが電気機器である。4～6月期トータルでは前期比 4.1%と大幅減少だが、4月に前月比 7.2%と落ち込んだ後、5月 2.2% 6月 10.7%と増加率が高まった。これには、地デジ移行や節電に伴う国内での特需に加え、IT・デジタル分野での世界的な生産調整が一巡し、輸出と輸入の双方向で荷動きが活発化している影響があると考えられる。

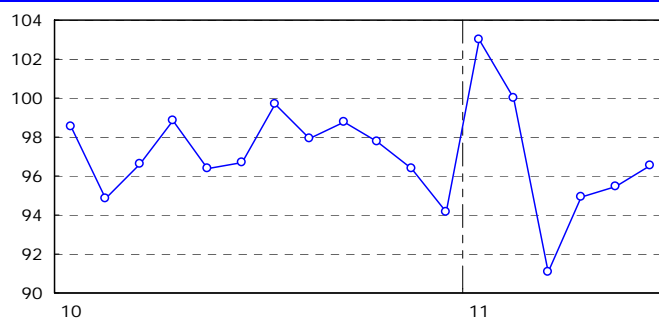
原子力発電所停止に伴う火力発電代替に伴い、増加が予想された鉱物性燃料の輸入は4～6月期に前期比 2.4%(1～3月期 2.0%)と寧ろ減少した。但し、3月に前月比 9.0%と大きく落ち込んだ後、4月 4.2% 5月 0.6% 6月 1.1%と徐々に水準を切り上げており、7～9月期には増加へ転じる見込みである。

品目別輸入動向(実質、2011年2月=100)



(出所)財務省、日本銀行

鉱物性燃料の輸入動向(実質、2011年2月=100)



(出所)財務省、日本銀行

¹ 繊維製品にはピークアウトの動きが見られない。これには、節電特需で夏物衣料が好調なことが影響している可能性がある。